

38 児玉信嘉宛野口英世16書簡

石原理年

明治33年12月29日、希望と自信に溢れ、米国の土を踏んだ野口英世の夢は破れ、失意中の彼を救ったのが、16歳年長で米国暮しの先輩医師児玉信嘉である。

やっと得た蛇毒の仕事も先の保障はなく、不安な日を送る野口を、フィラデルフィア鉄道重役・親日家でクエーカー教徒モーリス家の聖書研究会に紹介したのが児玉である。この会は、内村鑑三・新渡戸稲造らも参席、東京女子大学創立にも係りがある。野口は明治28年4月会津若松栄町教会で藤生金六牧師より受洗、児玉は同信の兄であった。

児玉の生家は、長門国(山口県)大津郡三隅村で累代儒医を営む傍ら、私塾福井塾を開き近郷子弟の育生に当たった。元来福井姓であったが、信嘉の父恒蔵晩年時、白藤

と改姓、信嘉は万延元年7月7日恒蔵・千勢の次男に生まれた。母千勢は児玉精斉の妹で信嘉は幼児伯父精斉の養嗣子となり、精斉長女千代と結婚した。信嘉の履歴は明治24年3月24日付北垣国道京都府知事に提出の同志社資料140号「私立同志社波里須理化学学校設立之儀ニ付伺並認可書」中の教員履歴と、同志社校友同窓会報(第77号昭和8年2月)を総合すると、「明治8年5月京都府立中学校入学。10年10月退校。同月大阪官立専門学校入学英学普通学を修学。14年廃校により同年6月北米ミシガン大学医学部に入學、19年6月卒業。『ドクトル・オブ・メデisin』の学位を得る。続いて英国エディンバラ大学医学部で生理学を修め20年6月『ライセンシエート』を得る」とあり、同志社交友追悼集第5巻には「昭和7年11月14日北米ニュージャージー州プレザントウィルにて死去。12月15日遺髪帰国、18日午後2時より小倉組合教会で葬儀、同月28日京都市若王子山墓地に埋葬、遺族・小倉市砂津294・児玉信太郎殿。略歴次の通り(前記履歴と重複分省略)、帰国の後京都にて開業。明治23年の頃より30年頃まで同志社ハリス理化学校に職を奉ず。30年再渡米

主としてフィラデルフィア、ニューヨークに在住。大正11年4月帰国約半年滞在。昭和7年永眠」。同志社ハリス理化学校在職記録（同志社資料146号）明治23年8月10日の項に「山寺容磨、児玉信嘉両氏ニ本校教員ヲ依頼スベキ招聘状ヲ発ス。就任ノ年月日左ノ如シ。年俸八百四拾円（八月十五日ヨリ）山寺容磨、年俸六百円（九月一日ヨリ）児玉信嘉氏」九月六日の項に「本日午前九時ヨリ始メテ教員会議ヲ本校鉱物室ニ開ク、当日出勤者如左。但議決ノ條件ハ教員議会議録ニ譲ル」とあり、以来廃校まで各会議録、諸届書、卒業証書担当教授の項に生理学教授ドクトル・オブ・メデイシン児玉信嘉と署名している。

同志社百年史に、明治25年京都看病婦学校教員に一旦辞職していた児玉信嘉が加わるが記録が見当らず詳細不明である。

妻千代は結婚一年余の明治20年病没。明治23年前神酔一の長女松枝と結婚、信太郎・嘉枝をもうけたが、松枝も28年夏舞子浜に避暑中急性腸炎で死去、二児を残し渡米したのが野口英世との交友契機となる。

フィラデルフィア時代の野口は信嘉と同宿したことも

あり、肝胆相照す仲であった。信嘉がニューヨークに移った35年2月11日付第一信「聖書の会に出席して“より、37年8月23日コペンハーゲン投函の葉書までの16信は、丹実編野口英世第2巻に完録されている。

これによると、(1)あらゆるチャンスを巧みに活用(2)借金返済の詫び言(3)山内ヨネに対する恋慕の反面、他女性には客観的理想像を浴せ(4)研究面では成果を強調、自信に溢れており、野口像の縮図を見ると共に、師小林栄、血脇守之助、フレキシナー等に宛てた格式ばった強がりがないことである。

第16信以降の書簡は現在見当らず、これで切れている点について、双方共にニューヨーク暮しとなりその必要性を欠いた為か、多忙の為か、他の要因によるものか調査研究を要する点である。

野口英世渡米初期の、物質的困窮と不安定な精神面を支え、野口の未来を開いた兄としての児玉信嘉像を残された書簡16信を礎に追ってみる。

(京都大学)